

究め難く、理解し尽くせない

今朝は、ローマの信徒への手紙から御言葉に聴いてゆきます。この手紙はパウロが書いたもので、新約聖書 27 巻のなかでも指折りの完成度をもった、ある意味、使徒パウロが知恵を傾けたキリスト教についての神学論文のような趣があります。全体で 16 章に分けられているのですが、そのクライマックスは 8 章にあるというのが大方の見るところのようです。神の愛という小見出しが新共同訳聖書ではここにはつけられていますが、有名な「すべてのこと相働きて益となる」という言葉や、「誰がキリストの愛からわたしたちを引き離すことが出来るでしょうか、誰が神に選ばれた者たちを訴えるでしょうか。人を義としてくださいるのは神なのです。」に始まって「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配する者も、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低いところにいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことは出来ないのです」で閉じられる 8 章は読むたびに胸を熱くさせられます。ところが、このように述べたパウロが 9 章に入って一転、わたしには深い悲しみがあると語り、肉による同胞、わたしの兄弟姉妹、つまりイスラエルのためならば、呪われても構わない。つまり、神に見捨てられた者となっても良いというのです。ファリサイ派のなかのファリサイ派であり、その熱心さのゆえに、イエスをキリストと信じる者たちをかつて迫害してまわっていたパウロは、自身は、キリストに捉えられて劇的な改心を遂げるのですが、同胞であるユダヤ人たちがナザレのイエスをキリストと認めることが出来ずにいる。一体、イスラエル民族の役割はなんだったのか、神の約束は無になっ

てしまったのか、イスラエルが救われる道はもうないのかということが、彼にとって絶対に避けることのできない問題だったのです。そこから今日読みました神の世界に対してもっておられるご計画、神の摂理に思いを馳せるパウロの、信仰の目で歴史を見る立場が明らかにされてゆくのです。現状、わたしたちの世界も新型コロナウイルスやロシアによるウクライナ侵攻など様々に思い煩うことの多い日を送っています。いうならば非日常的な出来事によって、わたしたちの土台が問われているように思います。こういうときだからこそパウロの言葉から現状の背後にある神のご計画を信仰によって受け止めることを学びたいですね。

さて今日、読みました箇所は、壮大な神の秘められたご計画をパウロが読み解いてゆく箇所です。もともとは9章から始まっており、イエス・キリストの福音を信じて救われた異邦人と、イエス・キリストの福音を拒絶したイスラエルという主題でまとめられたものです。それは神の信義に関わる問題としてさまざまな角度から考察されています。この直前の箇所ではパウロはオリーブの木の接木のたとえを用いて、イスラエルと異邦人の関係を説明しています。野生のオリーブであった異邦人が、神によって手入れをされたイスラエルというオリーブの木に接ぎ木をされた。接木による増やし方がユダヤ人から異邦人へと救いが手渡されていった比喻として語られています。接ぎ木のためには元の枝を途中で切らねばなりません。それは切られる枝の側、つまりイスラエルの側からすれば裁きです。しかし、そのような形でイスラエルが切り倒されたことによって枝の切り口に新しく異邦人たちが接ぎ木をされる。そして新しく神に養われる生き方がそこから始まってゆく。しかし、それを接木をしてもらった側の異邦人たちは誇ることはできません。なぜ

ならば、それは神さまの一方的な恵みだからです。アブラハム、イサク、ヤコブに約束された神の祝福の約束に異邦人たちは接木をされた。その事実を信仰において受け止めなければならない。これは神さまが地上の氏族はすべてあなたとあなたの子孫によって祝福に入るとアブラハムに約束したことの実現にほかなりません。ですから、やはりイスラエルを無視しては救いに入ることは出来ないのです。では一方のイエス・キリストの福音を拒み続ける同胞イスラエルはこのあとどうなるのか。もうこの世界における神の民イスラエルの役割は終わり、このまま失われてゆくのか、神がアブラハムに与えられた約束は無効になってしまったのか、そうではない。パウロは「ところで、神の言葉は決して効力を失ったわけではありません」と述べて、神の信義に偽りはないこと、そして、このイスラエルの不従順、キリスト・イエスの福音を拒んだ不従順を、異邦人が神の憐れみを受けるための神の秘められた計画であったと捉えるのです。ここでわたしは旧約聖書イザヤ書 6 章の有名な頑なの預言を思い出します。預言者イザヤが派遣される理由を、神は、彼の活動によって、イスラエルの民の耳が鈍くなり、心が頑なになり、立ち返って赦されることのないために、と告げた箇所です。なぜにそのような、と申しますし、実際に、預言は語られても悔い改めることをしないイスラエルの頑なさがあらわになってゆくのですが、こうした人間の不従順に対して、パウロは、イエス・キリストの派遣という神の御業にたって新しい見方を示しました。異邦人であるあなたがたはかつては不従順であったが、いまはイスラエルの不従順によって憐れみを受けた。同じように、いまイスラエルは異邦人が受けた憐れみによって頑なに、不従順になっているが、それは、彼ら自身も憐れみを受けるためであるというのです。ここにはパウロが到達した不信仰な者

を憐れんで義としたもう神という、ローマの信徒への手紙の主題ともいえる「信仰による義」の教えが実際に生かされていることは重要です。不信仰、不従順は人間の常の姿であり、神は人間のそうした状態によって左右されず、ただご自身の深い憐れみによって、イエス・キリストの出来事を起こし、神から遠いものを、神にそむく者を救われた。後にいる者が先になったわけです。そこに人間業としての救いではなく、神業としての救いがある、そうってよい。この神のご計画、神の富と知識と知恵はわたしたち人間の思いからは遠く離れており、その深さを極めつくすことの出来る者は誰もいない、パウロはそう述べて神に感謝と賛美をささげるのです。人間を不従順に閉じ込められたのはすべての人間を救うためだという主張は、救いを受け入れて教会につながって生きる者とされた今は、自分を振り返ってそうだと思わされますが、ふつうは思い至らない方法でしょう。不従順なイスラエルは裁かれ、赦しを受けることによって神の愛を知る。イスラエルは神につまづきましたが、その不従順の背きの罪を十字架で贖い取られたのが主イエスの死であったのです。罪ある者をご自身の命をささげて愛する愛をもってキリストは、この地上にたたれました。ここから新しい歴史が始まるのです。わたしたちのつまづきをも憐れみによって救いに導く機会とされる神は、すべての人間をやがてキリスト・イエスにおいてひとつとされる。そのような救いのご計画をパウロは明らかにしたのです。わたしたちの不従順、不信仰はすべてキリスト・イエスの十字架に担われて、恵みに変えられる。あの方の裁きが、わたしに対する恵みとなる。この深い、誰にも及びもつかなかった神の愛と知恵に対する賛美が、パウロの締めくくりの言葉です。「いったい誰が主の心を知っていたらうか。だれが主の相談相手だったらうか。だれがまず主に

与えて、その報いを受けるであろうか」、そのような者は誰もいない。ただ神の恵みと憐れみだけが、すべてを救うということパウロは知っている。そして、それで十分なのです。このパウロの確信は「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっている。栄光が神に永遠にありますように」という賛美、頌栄となって一連の議論を締括しています。ここには神の民イスラエルの信仰が要約されています。すべてのものは神によって創造され、神によって保たれ、保護され、そして神による完成へ向かっている。創造から終末へといたる歴史のなかで、神はすでにわたしたちを愛して、その独り子イエスをお送りになり、罪と死の支配に勝利された。この裁き主であり、贖い主であり、救い主である主イエス・キリストと結び合わされているからこそ、パウロは現状のイスラエルに心を痛めつつも、なお絶望することなく、終わりの日に神がすべてを完成されることを信じて、救いの希望を主において生きることが許されているのです。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっている」という、このパウロの信仰による現実の捉え方と生き方の向きを、わたしになりと言い換えれば、主の恵みのご支配を信じて、この世を生き抜くという姿勢になります。神のご計画は人間の理性を越えたところにあり、究め難く、理解しつくせない。それはご自分の独り子を死に渡してまで罪人を救おうとされるはかり難い愛のなせる業です。だから賛美するしかない。感謝して受けるしか無い。そのような性質のものです。恵みなのです。わたしたちもこの神の秘められたご計画、わたしたちを憐れんでくださる神の恵みと愛を信じて与えられた持ち場を生き抜きたい。最後のことばをわたしたちに語ることがお出来になるのは、罪と死の支配からわたしを贖い取ってくださった主イエス・キリストです。わたしたちは

この終わりの勝利から現在を見ることで、人智を超えた神の平安に守られながら歩むことが許されているのです。

すべてのものは神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が世々、神にありますように！

お祈りいたします。